# 戦後の影

## (1) インフレーション

インフレは、追求すべき問題というよりは、むしろ多くの矛盾を吸収して到達した回答である、という趣旨のことを言ってのけたアメリカの経済学者がある。私は、それを聞いて、あるフランスの女優が「私にとって性は研究すべき問題というよりは、一つの回答にすぎない」といった言葉を思い出す。

インフレは、社会や産業の根底をゆさぶり、われわれの生活をむしばみ、われわれの心理に不安をもたらし、焦燥や衝動を惹き起すものである。

試みにオックスフォード辞典によると、インフレーションという言葉は、まず、風や空気で膨張した物理的状態、物価の騰貴や不換紙幣の発行といった経済的状態があげられている。さらに、精神や誇りの昂揚、虚勢や虚飾をおこす状態で、いずれもが適当な程度を超えたものであると書いてある。

「過ぎたるは及ばざるが如し」というが、程度を超えた状態というのは本来よいことではない。インフレが概して個人にとっても、社会にとっても、さらには国にとっても歓迎すべき状態でないことは明らかである。しかし、われわれの歴史を振り返って見ると、インフレは常にわれわれとともにあった状態であるといえる。

人間は本来、停止や沈滞より刺激や活動を好む本性を持っている。適度のインフレ傾向は、利潤を求める機会を与え、経済活動を刺激し、人々の意識を昂揚する。残念ながら人間は常に足るを知り、止るを知るほど賢明ではない。したがって、人間は適度のインフレ傾向をデフレ傾向より好むようであり、ある意味でインフレは、われわれ人間の本性に内在している痼疾であるとも言えよう。

われわれの経済的発展の歴史には、景気循環の波があり、好況と不況、インフレとデフレのうねりの繰りかえしがあったとされているが、事実はほとんどインフレ基調で推移している。またインフレの波を適度な範囲に押え込み、あるいはインフレを招来しない範囲での経済発展の契機を求めて、経済学は懸命の努力を重ねてきた。事実、インフレを封じこむ経済の仕組みや、インフレを解決する手法について多くの学問的成果もあるにはあった。しかし、インフレは狡猾にも、

いつも、われわれの裏をかき、予期しないところからわれわれを襲い、われわれの努力をあざ笑うかのように、常にわれわれの前にあったのである。

インフレ克服の闘いは、時として、自分の影を追い越そうとする努力のような空しさを憶えるが、われわれは、われわれの努力をギブ・アップするわけにはいかない。それでよいのだと諦めたわけではないはずである。本来、インフレを欲したわけではないが、残念ながらそうなってしまった、というのが実相であろう。インフレを起してはならない、せめてインフレを昂進させてはならないという課題を、たしかに問題にしたが、その目的は十分達成されず、結果として、われわれは、インフレの中にたっぷりっかつていたのである。インフレは、いろいろの矛盾を吸収しながら、その回答としてわれわれの前にあったのである。

今日、われわれの前にもインフレが不気味な影を落している。われわれは、この影をどのようにして払いのけるかを問題にしている。われわれは、人間の歴史についてまわり、いつもわれわれと共にある狡いインフレという伴侶を抑えこみ、それを手なずけるのに、結論を急いだり諦めてはならない。粘り強く、幾度でも挑戦を繰り返して行かねばならない。その過程の中にわれわれの生きがいがあるのである。

## (2) 平和と秩序

戦争が終ってから、三十年あまりの歳月が流れた。その間、世界には、朝鮮やヴェトナム、さらには中近東等において相当大規模の戦争があった。また、多くの国で革命やクーデターが相次いで起った。しかし、幸いに第一次、第二次の世界戦争に匹敵するような大きい熱い戦争は起らなかった。第三次の世界戦争は、必ず起るという説もあるが、最終兵器といわれる核兵器の存在等によって、それは起り得ないという説がより有力に主張されている。

人類の歴史は、見方によっては、戦争の歴史であったともいえる。一つの戦争が終ると、その跡始末に忙殺される。その始末がつくかつかない間に、次の戦争の準備がはじまる。そして熱い戦争が闘われる。それが終るとその跡始末に忙しくなる。そういうスパイラルを繰り返してきたのが歴史であった。

ところが、最近の三十年間は、大きい戦争がなかったのだから、これはこれまでの歴史の歯車に一つの変調をもたらした時期であったといえる。

われわれは、こうした状態——それを平和ということもできよう——を望ましい状態であると思う。ただ、それには一つの大きな条件が必要である。それは、この状態において人間がスポイルされることなく、社会や地域、国や世界の秩序が、どうにか維持されることが大前提になって

いることはいうまでもない。

本来、人間というものは厄介な存在である。人間が心の奥深く希求して已まないものは、安息でもなく、博愛でもなく、平和でもない。それは動きであり、緊張であり、争いである。人間が一番忌み嫌うものは、退屈であり、無為である。人間は、永く退屈な状態に耐えられるものではない。ところが、平和というものは、この耐え難い退屈を生むものなのである。争いの間の休息以外に、われわれは平和という状態を経験したことがない。永続する平和というものは、人間性にとって耐え難いものであるといえよう。

戦後三十余年、世界的に平和な状態が続き、人間の理性は、戦争という狂気を押え、歴史に大きな転換をもたらしたかのように見える。しかし、だからといって戦争を繰り返してきた人間の本性が変ったわけではない。われわれを戦争に駆り立ててきた奔馬のような狂気は、そう簡単にあばれ出すことをやめるほど、素直な生易しいエモーションではなさそうである。

なるほど戦後、平和運動というものが大変活発であった。しかし、つきつめて見れば、それは平和というタイトルをもった闘いに他ならない。平和を永続させるためにわれわれは、直ちに〝平和のための平和という名の闘い〟を断え間なく続けなければならなくなるのである。そして、それは、われわれ自らとの戦いという困難に満ちた性格を帯びている。

そのように永続する平和は、人間にとって本来耐え難いものであっても、それに耐え得る手だてがあれば、申し分はない。ところが、平和の招来する問題が、われわれの手にあまり、処理できないほど厄介なものになってくると、われわれは全く当惑するものである。最近頻発する爆破事件やハイ・ジャック等に見られるように、極めて少数の人々の所作によって罪もない多くの人々が犠牲を受けるといった状態は、いわば始末の悪い平和の問題であり、それは、大きくは「平和の代償」といえないこともない。

しかし、よく考えてみれば、本来平和が戦争より貴いもの、価値あるものであれば、それを購う代償も、戦争に投入する犠牲より高価なものであっても不思議ではなく、平和を守るための努力が戦争の辛苦に勝るものであっても当然であろう。

永続する平和 —— それは人類の永い歴史の上にない未知の領域であり、われわれは、それを手探りで求め続けなければならない。これからの政治の最大の課題は、実はこの平和の代償をどのようにして支払いつつ、平和の中で、われわれの秩序をいかにして維持するかということになるのではなかろうか。文学や芸術、スポーツや演芸、その他あらゆる人間のいとなみや余暇の利用が、その観点から見直され再評価される時代がきたといえよう。かくして選択された対象の配列をどうするかが、政治にとって大きい問題の一つになってきたのである。

### (3) 戦争の傷跡

戦後三十余年、わが国は一見順調に復興したかのように見える。経済は繁栄し、生活は便利になり、所得や貯蓄は増え、貿易は伸び、赤字に悩む世界各国をよそに、国際収支も黒字基調に推移している。

外見的に見れば、どこといって欠点のない健康体なのだが、仔細に観察すると何か不自然に感じる問題が少なくない。今なおわが国には、多くのタブーがある。憲法問題、防衛問題、原子力問題、基地問題等々。それらは、いずれも煎じつめれぱ戦争の問題に帰着する。また、国内で発生した大きな社会的トラブルも、ほとんどみな戦争とその後遺症にかかわりをもっている。

大きな戦争のあとには、必ず戦争という愚行への反省が高まり、平和主義が力強く台頭するものである。これは、いかなる時代、いかなる国においても共通の現象である。ところが、わが国の場合のように、いうところの戦争罪悪意識が戦後三十余年も続き、あらゆる問題処理に大なり小なり影を落している国は稀なように思われる。教育はもとより、広く社会生活全般に、さらには内政や外交の処理にまで、その影が色濃く残っている。

人間が集団をつくり、お互いに敵、味方となって憎しみ合ったり、殺し合ったりする戦争が罪悪であり、人類史の汚点であることは言うまでもない。しかし他面、人類の歴史が実は戦争の歴

史であり、戦争の準備と遂行、その跡始末と次の戦争の準備というスパイラルを繰り返し、その間の僅かな休息の時代が、たまゆらの平和の時代であったことも否めない厳粛な事実である。

人間というものは、理性では理解し得ないような戦争を性こりもなく繰り返してきたものである。そこには集団の狂気ともいうべきエモーションが深くかかわっている事実も見逃がせない。同時にわれわれは個人としても、もともと退屈を嫌い、争いを欲する傾向をもっている。うずくような緊張の中に人生の生きがいを見出そうとしている。緊張は、平和の中には発見することができないからである。そうした人間性の非合理性という、いわば自明のことが、人の口の端にのぼるようになったのも漸く最近になってのことである。

戦後、戦争の罪悪意識を強調することによって、自虐的な満足に陥った人も少なくなかった。この罪悪意識を積極的に主張することによって、自らの平和主義の証し、ないしは免罪符に代えようとする向きも少なくはなかった。われわれは罪人である一だから罪の償いをしなければならない。われわれは加害者である——だから自己を主張する権利はない。このような論法は一応うなずける面をもってはいるが、それだけでは問題の解決にはならない。そこから、どのようにして建設的な一歩を踏み出すかということこそが問題であるのだが、そのような努力がこれまで十分に見られなかったことも否めない。

それはあたかも思春期に過ちを犯し、心に傷を負った者が、いくつになってもその影を背負って歩き、責任ある社会人になりきれないでいるのと似ている。いって見れば、精神的に健康な状態であるとはひいき目に見てもいえない。自由世界第二位の経済大国となり、国際社会の重要な構成員でありながら、自らの主体性を放棄し、主張すべき意見や政策を持たず、当然果すべき義務を果さないで過ごしてきた。

個人としても、国民としても、自らの主体性を確立することが問題である。ところが、それが、為されないまま、わが国民性のもう一つの特徴である甘えと結びつき、健全な国際社会の常識では、とうてい理解しかねるような独善に終始してきた。これはいわば子供の特権が忘れられず、大人になっても義務と責任を回避したがる態度であるといえよう。

国際環境は日増しに厳しくなり、国と国との軋轢は、次第にゆとりのないものになりつつある。いまや国際社会の重要な構成員が、国際関係の成行きや、自国の進路に対し明確な意思を持たず、果すべき役割りを果さずにいることはもはや許されない。また、個人についていえば、自己の責任を回避し、すべてを国や社会や他人に押しつけていることも、同様にこれ以上許されるものではない。

もうこの辺で、戦争の罪悪意識という自虐の姿をとった甘えというか、待避壕というか、そう

いうものに安易に頼る状況からの脱却を試みなければならなくなった。少々つらくとも、そういう衝立に頼らないで、これまで使いなれた色眼鏡は外して、自らの目でものを見、自主的に判断し、自らの意思を確立しなければならない。そして新しい主体性を確立して、堂々と生きていかなければならない。また、国際社会においても、名実ともに名誉ある地位を認められる構成員の立場を回復したいものである。国際秩序への積極的参画を通して、国としての個性的な主体性の再構築を進めることが、今日強く要請されていると言わなければならない。個人としても自らの主体性、何ものにも捉われない自主性を確立することが、戦後に生じた新たな諸問題に正しく対応するための前提であることは言うを俟たないところである。

（昭、五二・一一・三）